様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年　3 月　25 日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2010
課題番号：２０５３０５６４
研究課題名（和文）　インターネット上の攻撃性と規範の形成

研究課題名（英文）　Aggression on the Internet and norm formation

研究代表者
吉田　富二雄（YOSHIDA FUJIO）
筑波大学・大学院人間総合科学研究科・教授
研究者番号：80182781

研究成果の概要（和文）：
本研究では，調査・実験の両側面から検討を行い，(1) ネット上のコミュニケーションに伴う相互不達性および脱抑制的行動の発生，(2) ネット上での脱抑制的行動に関する社会現象としての“ネットいじめ被害者における相談行動の抑制”と“悩み相談コミュニティ上での共有行動”に関する心理的過程，(3) ネット上において規範を導入し，攻撃行動を抑制する方法としての，コミュニティ管理者による介入の有効性，の 3 点について明らかにした。

研究成果の概要（英文）：
Purpose of this study was to examine the following three problems associated with aggression on the Internet. First, the factors that produce the discommunication and that increase/decrease uninhibited behaviors were examined on the experimental compute-mediated communication settings. Second, to demonstrate the psychological processes related to uninhibited behaviors on the Internet, we investigated the mediating processes for inhibition of consulting behavior for victims of cyberbullying and for sharing behavior on the self-help online community. Third, we explored the way to inhibit the aggressive behavior and to introduce the group norm on the online community. Results suggested the effectiveness of active intervention of managers.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
総　計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：社会心理学
科研費の分科・細目：メディア・電子ネットワーク
キーワード：インターネット，攻撃性，規範形成

１．研究開始当初の背景

現在，インターネット（以降ネットと略記）は地域・世代を問わず多くの人々に利用され，我々の生活の中に深く浸透している。それに伴い，ネット上の匿名的コミュニケーションに特有な現象に関しても，現代の社会問題として多くの研究がなされてきた。特に，ネット上は匿名的な空間であり，ほぼ言語的表現のみに基づいてコミュニケーションが交わされるために，発言内容に対する極端な誤

解・敵意的解釈や，他者への攻撃的な言動・表現（フレーミング）が生起しやすいことが多くの研究により指摘されている。しかし従来の研究では，ネットの利用頻度・時間という量的側面と攻撃性の関連を相関的に検討するものがほとんどであり，“ネット上のコミュニケーションにおいて，どのようにして極端な誤解や攻撃的言動が生じているか”という点や，“実際の場面において，どのような問題が生じているか”という点，ひいては，“ネット上の脱抑制的行動を，どのように抑制するか”という防止策などに関して，内容的側面からの検討は十分になされていないのが現状である。

そこで本研究では，(1) ネット上のコミュニケーションに伴う相互不達性および脱抑制的行動，(2) ネット上での脱抑制的行動に関する社会現象，(3) ネット上において規範やルールを導入し，攻撃行動を抑制するための方法について，調査・実験の両側面から検討を行った。

２．研究の目的

(1) ネット上のコミュニケーションに伴う相互不達性および脱抑制的行動の検討

研究１：ウェブログを題材として，読み手が，ウェブログ上の情報に基づき，書き手の人物像に対する印象形成を行う際の過程について，実験により検討した。

研究２：脱抑制的行動のうち，自己開示に焦点を当て，匿名性を“どの情報が匿名か”という情報の観点から捉えながら，自己・他者のどの種類の情報が匿名であるとき，自己開示が促進あるいは抑制されるかについて，調査と実験により検討した。

(2) ネット上での脱抑制的行動に関する社会現象の検討

研究３：ネットいじめの被害者において，周囲への相談行動がなされにくいことに着目し，クローズ型ウェブ調査を被害者に対して実施した。そして第一に，相談行動を抑制すると考えられる，被害時の脅威認知の具体的な内容を分析した。続いて第二に，相談行動が抑制されるまでの過程について，被害時の脅威認知，無力感を媒介要因とするモデルを想定し，これを検討した。

研究４：悩み相談掲示板などのオンラインコミュニティに焦点を当て，コミュニティ上での共有内容，ならびに，コミュニティの利用が自尊心・社会性・問題解決行動に及ぼす影響について検討した。

(3) ネット上において規範やルールを導入し，行動に抑制をかけるための方法の検討

研究５：現行のオンラインコミュニティ上の管理者の行動に着目し，実際にどのような管理が行われ，どのような規範が形成・提示されているのかについて検討した。またそれにより，コミュニティの雰囲気・生産性にどのような影響を及ぼしているのかを分析した。

３．研究の方法

研究１：以下の手続きでウェブログの書き手 126 名（男性 62 名，女性 64 名），読み手 126 名（男性 63 名，女性 63 名）の回答を得た。

(a) ウェブログの書き手：ウェブログ利用者を対象にオープン型ウェブ調査を実施し，“自身がどのような人物であるか”について尋ねた。その後，トップページ・プロフィール・7 日分の記事を画像として保存した。

(b) ウェブログの読み手：まず，実験室内の PC にて，保存されたウェブログを提示した。そして，“その書き手がどのような人物であるか”をイメージするように教示したうえで，ウェブログ画像の閲覧を求めた。その後，質問紙への回答を求めた。

研究２：調査と実験により検討を行った。

（a）調査：茨城県内の大学生 187 名（男性 86 名，女性 100 名，不明１名；平均年齢 20.44 ±1.54 歳）に，質問紙を直接配布するか講義中に配布し，無記名の形で回収した。

（b）実験：本研究では，２つの実験を行った。実験１では，他者の属性情報（匿名条件，非匿名条件）を要因とする１要因実験参加者間計画であった（女子大学生 28 名）。また，実験２では，他者の属性情報（匿名条件，非匿名条件）を要因とする１要因実験参加者内計画であった（女子大学生 30 名）。

実験操作　チャット中のプロフィール画面において，相手の性別と年齢を呈示するかどうかを操作した。

実験課題　相互作用の課題として，TAT 図版を基に２人で話し合い，協力して１つの物語を作成する物語作成課題を用いた。

手続き　参加者募集の際に，実験は男女・大学生を問わず様々な方々を対象としていると説明した。参加者２名が実験室に入室後，実験の説明を行った。次に，他者の基本情報に関する説明を行い，続いてチャットの利用方法の説明・練習を行った。そして，上記の実験課題について 40 分を上限として行った。終了後，質問紙への回答を求め，最後にデブリーフィングを行った。



Figure 1. 研究 2 における実験の流れ.

研究３：ネットいじめの被害経験を持つ者を対象に，2 回のクローズ型ウェブ調査を実施した。それにより，最終的に 217 名（男性 85 名，女性 132 名）からの回答を得た。質問紙ページ上では，ネットいじめの被害経験，被害時の脅威認知の内容，被害時に取った相談行動などについて尋ねた。

研究４：問題や悩みを共有するオンラインコミュニティとして，インターネット上で悩み相談が行われている掲示板や SNS のコミュニティを対象に，クローズ型ウェブ調査を実施した。その結果，悩み相談が行われている掲示板や SNS のコミュニティの利用者 67 名（男性 25 名，女性 42 名）からの回答を得た。質問紙ページでは，コミュニティ上での共有内容や，現実生活への影響について尋ねた。

研究５：オンラインコミュニティの管理経験を持つ者を対象に，2 回のクローズ型ウェブ調査を実施した。それにより，302 名（男性 185 名，女性 117 名）の回答を得た。質問紙ページでは，コミュニティ上での管理行動や規範のあり方，コミュニティの雰囲気や生産性などについて尋ねた。

４．研究成果

研究１：本研究の結果，書き手が自覚する「自己像」と，読み手が形成した「人物像」とはほぼ一致せず，かつ，前者は後者に比べて概して否定的に捉えられていることが示された。より具体的には，(1) 顕在的で対他的な特性（外向性，自己主張性）は，書き手の「自己像」は読み手にもそのままの形で伝わりやすいこと，(2) 顕在的で対自的な特性（能動的・実践的態度，自己の創造・開発，優越感・有能感）は，書き手の「自己像」が拡大あるいは縮小されながら伝わること，(3) 潜在的・内面的で対自的な特性（神経症傾向，こだわり・執着心，不誠実性，開放性，調和性，

自他共存，他者尊重）は，書き手の「自己像」と関係なく捉えられることが示唆された。

また，書き手への共感は，読み手にとっての「書き手の人物像」の印象形成の補助となるものの，むしろそれこそが書き手の「自己像」と読み手による「人物像」の差異を拡大させている可能性も示された。

研究２：調査からは，CMC における自己・他者に関する情報は，“私的情報（各個人の興味や関心，嗜好性など，個人に関するより具体的な情報）”，“属性情報（他者を判断する上で最も基本的な情報）”，“識別情報（その個人がどこの誰であるかを特定する情報）”の 3 種類に分類されることが明らかとなった。

また実験からは，匿名な CMC 空間における他者の“属性情報”は，相互作用中の不安感を減少させ，他者への自己開示を促進する可能性が示された。さらに属性情報は，自己開示において，敬語表現を増加させ，パラ言語の使用を減少させることも示された。

研究３：まず予備調査を通して，回答者の 3.5%が，ネットいじめの被害経験を持つことが示された。またネットいじめ被害者の約 7 割が，学校や部活でもいじめを受けていた。

さらに本調査からは，被害時の脅威認知の内容を分析した結果，脅威認知は“孤立性”，“常時性”，“波及性”の 3 側面から捉えられることが示された。またこの脅威認知は，ネットいじめへの無力感を高め，最終的に周囲への相談行動を抑制することも示唆された。

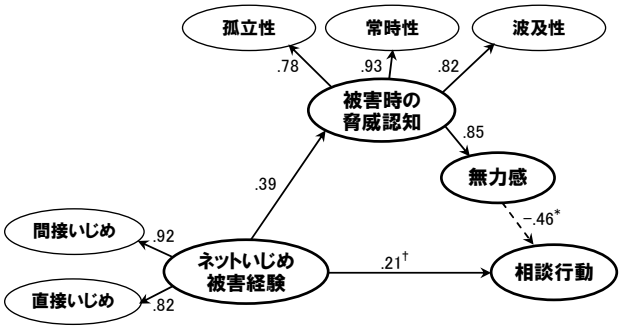


Figure 2. 相談行動の抑制に至るまでの過程.

研究４：本研究の結果，オンラインコミュニティにおける共有行動の内容は，“目標・関心の共有”，“問題・悩みの共感”，“体験・知識の交換”，“怒り・不満の発散”という 4 側面から捉えられることが示された。

また，問題や悩みにともなう症状が深刻であるほど，オンラインコミュニティ上での共有行動が促進されることが明らかとなった。加えて，オンラインコミュニティ上での共有行動や所属感獲得が，現実生活における自尊心・社会性・問題解決行動に影響を及ぼしていることが示唆された。より具体的には，(1) 再体験（フラッシュバック）の状態にある場合，コミュニティ上で，自分と同じ問題や悩みを抱えている他者の存在を認識し，安心感・安全感を得られることが問題解決行動に重要となる，(2) 覚醒亢進の状態にある場合，他者とネガティブな感情を共有することで，“ネガティブになることは他の誰にでもあることで，必ずしも悪いことではない”と自分を容認することが，自尊心を回復するために重要となる，(3) 問題・悩みに対して直面し始めている状態では，他者と問題や悩みを共有・言語化することが，再び自己を社会に位置づけていく際に重要な役割を果たす，という可能性が示された。

研究５：本調査の結果からは，オンラインコミュニティにおける管理行動は，“コミュニケーションの調整・介入”，“新規参加者への配慮”，“トラブルへの対処”，“メンバーの削除・整理”という 4 側面から捉えられることを明らかにした。またオンラインコミュニティにおける規範については，“他者の尊重”，“投稿時の配慮”，“攻撃・逸脱行動の禁止”，“不適切な表現・交流の禁止”，“過剰な反応・議論の禁止”の 5 側面から捉えられることが示された。

さらに，コミュニティ上での攻撃的言動の

発生は，直接的に，コミュニティの話題の硬直・停滞を促進していた。同時に，攻撃的言動はコミュニティの雰囲気の悪化にもつながり，さらに雰囲気の悪化を媒介して，話題の硬直・停滞を促進し，情報の交流・集積を抑制していることも示された。

しかし，攻撃的言動の発生は，コミュニティの管理行動・規範の提示を促進していることも明らかとなった。そのようにして促された管理行動・規範の提示は，コミュニティの雰囲気の改善にもつながり，最終的に話題の硬直・停滞を抑制し，情報の交流・集積の促進をもたらすことも示された。

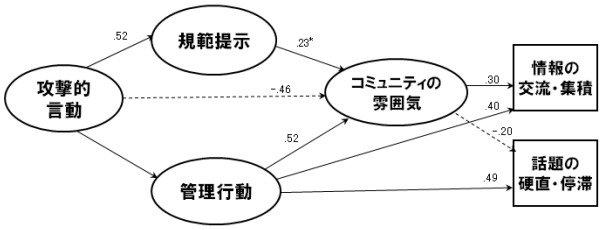


Figure 3. 管理行動と規範提示がコミュニティの雰囲気・生産性に及ぼす影響（抜粋).

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計５件）

①藤　桂・吉田富二雄　オンラインコミュニティにおける規範の形成と維持―管理者の機能に着目して―，日本社会心理学会第 51 回大会，2010 年 9 月 18 日，広島大学.

②藤　桂・吉田富二雄　ネットいじめ被害時における認知と対処行動の関連，日本心理学会第 73 回大会，2009 年 9 月 27 日，立命館大学.

③佐藤広英　CMC における匿名性が自己開示に及ぼす効果　日本心理学会第 73 回大会，2009 年 9 月 26 日，立命館大学.

④藤　桂・吉田富二雄　ウェブログ上に表現される自己―執筆者の自己評定と閲覧者による人物評定の比較―，日本心理学会第 72 回大会，2008 年 9 月 20 日，北海道大学.

⑤Fuji, K. & Yoshida, F. Can blogs tell me who you are? :Personality impression based on blogs in Japan , XXIX International Congress of Psychology, 2008 , July , 21st , International Congress Centrum Berlin.

６．研究組織

(1)研究代表者

吉田　富二雄（YOSHIDA FUJIO）

筑波大学・大学院人間総合科学研究科

・教授

研究者番号：８０１８２７８１

(2)研究分担者

菊地　正（KIKUCHI TADASHI）

筑波大学・名誉教授

研究者番号：８０１６１４２０

(3)研究協力者

藤　桂（FUJI KEI）

筑波大学・大学院人間総合科学研究科

・準研究員

研究者番号：５０５８１５８４

佐藤　広英（SATO HIROTUNE）

筑波大学・大学院教育研究科・準研究員

研究者番号：００５９８６９１